

学校の在り方地区検討委員会（西北地区）

《 検討結果報告書（案） 》

令和8年5月〇日

目 次

1	中学校卒業予定者数及び県立高等学校募集学級数の見込み	1
2	学校の在り方に関する主な意見	2
(1)	目指す学校像	2
(2)	単位制	2
(3)	少人数学級編制	2
3	全日制課程の学校規模・配置	3
(1)	委員の意見に基づく学校配置シミュレーション	3
ア	学級減（五所川原工科高校普通科を2学級減）で対応	3
イ	学級減（五所川原高校と五所川原工科高校普通科を1学級ずつ減） で対応	4
ウ	学校の新設（五所川原農林高校と五所川原工科高校を統合）で対応	5
(2)	シミュレーション以外の学校規模・配置等に関する意見	6
4	定時制課程及び通信制課程に関する意見	7
【参考1】	委員名簿（西北地区）	8
【参考2】	オブザーバー名簿（西北地区）	9

【参考 3】学校の在り方地区検討委員会の開催状況（西北地区）	9
--------------------------------------	---

【参考 4】地区懇談会（令和 7 年 1 0 月実施）等の主な意見	10
---	----

1 中学校卒業予定者数及び県立高等学校募集学級数の見込み

		東青	西北	中南	上北	下北	三八	県計
中学校卒業 予 定 者 数	R9	2,208人	827人	1,933人	1,442人	479人	2,265人	9,154人
	R14 (対R9)	1,894人 (△314)	756人 (△71)	1,816人 (△117)	1,343人 (△99)	392人 (△87)	2,027人 (△238)	8,228人 (△926)
	R19 (対R9)	1,489人 (△719)	552人 (△275)	1,399人 (△534)	1,086人 (△356)	285人 (△194)	1,508人 (△757)	6,319人 (△2,835)
県立高等学校 募集学級数	R9	42c1	17c1	36c1	32c1	12c1	37c1	176c1
	R14 (対R9)	36c1 (△6)	15c1 (△2)	34c1 (△2)	27c1 (△5)	11c1 (△1)	35c1 (△2)	158c1 (△18)
		37c1 (△5)	15c1 (△2)	35c1 (△1)	27c1 (△5)	11c1 (△1)	35c1 (△2)	160c1 (△16)
	R19 (対R9)	29c1 (△13)	11c1 (△6)	27c1 (△9)	22c1 (△10)	9c1 (△3)	26c1 (△11)	124c1 (△52)
		30c1 (△12)	11c1 (△6)	27c1 (△9)	23c1 (△9)	9c1 (△3)	27c1 (△10)	127c1 (△49)

※ 募集学級数の上段は現行どおりの学級編制とした場合、下段は商業科及び家庭科で少人数学級編制を実施した場合。

※ 中学校卒業予定者数は、各年3月の見込み。

※ 地域校及び令和10年度に配置する地域共育校は、学級数が変動する可能性があるため、西北・上北・下北・三八地区においては、募集学級数に変動が生じることがある。

2 学校の在り方に関する主な意見

(1) 目指す学校像

- 技術革新の進展や地域の産業構造を踏まえ、産業の発展に向けて主体的に取り組む人財や地域の産業支える人財を育成するための学校・学科が必要である。
- グローバルな視点を持ち、国内外で活躍する人財やイノベーションを起こす主体的人財等、新しい時代を主体的に切り拓くことのできる人財を育成するための高校が必要である。
- 小中学校や地域等と連携し、郷土への誇りや愛着を育む教育、キャリア教育を更に充実させる必要がある。
- 生徒が多様な科目を選択できるよう、遠隔教育を充実させる必要がある。

(2) 単位制

- 生徒の興味・関心に応じて多様な科目を選択できるようになることから、単位制を拡充するべき。

(3) 少人数学級編制

- 学級数や学科を維持するため、教員数が減らないよう県で予算を確保した上で、全ての学科で少人数学級編制を実施する必要がある。
- 普通科の特色化・魅力化を図るためには、実社会につながる授業や理数探究等の学びが必要であり、これらを実施するに当たっては、相当の学校規模が必要であることから、少人数学級編制については限定的とするべき。

3 全日制課程の学校規模・配置

(1) 委員の意見に基づく学校配置シミュレーション

ア 学級減（五所川原工科高校普通科を2学級減）で対応

第2期実施計画	前期実施計画	
R 9	R 1 4	
五所川原 普通科 4 学級 理数科 1 学級 5 学級 木造 3 学級 五所川原農林 3 学級 五所川原工科 普通科 2 学級 工業科 3 学級 5 学級	△2学級 →	五所川原 普通科 4 学級 理数科 1 学級 5 学級 木造 3 学級 五所川原農林 3 学級 五所川原工科 普通科 0 学級 工業科 3 学級 3 学級
1 6 学級	→	1 4 学級
【地域校】 鰺ヶ沢 1 学級		【地域共育校】 鰺ヶ沢 1 学級
1 7 学級	→	1 5 学級

シミュレーションに関する意見

- 五所川原高校を1学級減とすることで、進学校としての五所川原高校の特徴が消えないよう、同校の5学級を維持すべきである。
- 学力層の広がり解消し、切磋琢磨して勉強に励む教育環境を整備するため五所川原工科高校の普通科を閉科し、五所川原高校に普通科を集約ことが考えられる。
- ◇ これまでの高校教育改革の経緯や中学生の普通科の選択肢の確保等の観点を踏まえると、五所川原工科高校普通科の2学級減は避けるべき。
- ◇ 五所川原工科高校を工業科単科の高校とし、工業人の育成に特化した学校とすることも考えられる。

○：シミュレーションの基となった意見

◇：シミュレーションに対する意見

イ 学級減（五所川原高校と五所川原工科高校普通科を1学級ずつ減）で対応

第2期実施計画	前期実施計画	
R 9	R 1 4	
五所川原 普通科 4 学級 理数科 1 学級 5 学級 木造 3 学級 五所川原農林 3 学級 五所川原工科 普通科 2 学級 工業科 3 学級 5 学級	△2学級 →	五所川原 普通科 3 学級 理数科 1 学級 4 学級 木造 3 学級 五所川原農林 3 学級 五所川原工科 普通科 1 学級 工業科 3 学級 4 学級
1 6 学級	→	1 4 学級
【地域校】 鰯ヶ沢 1 学級		【地域共育校】 鰯ヶ沢 1 学級
1 7 学級	→	1 5 学級

シミュレーションに関する意見

- 普通科を有する高校を複数配置するため、五所川原高校普通科と五所川原工科高校普通科をそれぞれ1学級減とするべき。
- ◇ 就職から進学まで幅広い進路志望に対応する必要があるものの、五所川原工科高校の普通科が1学級となることで、教職員の負担が大きくなる懸念がある。
- ◇ 五所川原工科高校普通科を1学級とする場合、同校普通科をデータサイエンス科に改編することも考えられる。
- ◇ 中学生の選択肢を確保するため、五所川原工科高校の普通科も維持するべき。

○：シミュレーションの基となった意見

◇：シミュレーションに対する意見

ウ 学校の新設（五所川原農林高校と五所川原工科高校を統合）で対応

第2期実施計画	前期実施計画	
R 9	R 1 4	
五所川原 普通科 4 学級 理数科 1 学級 5 学級 木造 3 学級 五所川原農林 3 学級 五所川原工科 普通科 2 学級 工業科 3 学級 5 学級	△2学級 →	五所川原 普通科 4 学級 理数科 1 学級 5 学級 木造 3 学級 統合校 農業科○学級 工業科○学級 6 学級
1 6 学級	→	1 4 学級
【地域校】 鰯ヶ沢 1 学級		【地域共育校】 鰯ヶ沢 1 学級
1 7 学級	→	1 5 学級

シミュレーションに関する意見

○ 本県や当地区の産業の維持・発展のためには、五所川原工科高校と五所川原農林高校を統合することも考えられる。

◇ 統合に当たっては、施設の状況や新校舎の移転先等の課題がある。

○：シミュレーションの基となった意見

◇：シミュレーションに対する意見

(2) シミュレーション以外の学校規模・配置等に関する意見

<学校規模・配置>

- 職業教育を主とする専門学科を維持する必要がある。
- 地域の産業構造等を踏まえ、五所川原農林高校、五所川原工科高校工業科、木造高校、鰯ヶ沢高校については、学級数を維持しながら配置を継続する必要がある。
- 学校規模・配置については、他地区への進学状況等も考慮して検討する必要がある。
- 生徒自身が学びたいことを学べる学校を地区内に配置すべき。
- 市部だけではなく、郡部にも高校を配置し、公共交通機関を利用した子どもたちの環流の促進につなげる仕組みをつくるべき。

<統合等>

- 10年間の中学校卒業予定者数の推移等を踏まえると、後期実施計画では統合が必要になる可能性がある。

<学科等>

- 学科改編を行う場合には、教育内容等をイメージできる学科名とする必要がある。
- 子どもたちをまんなかにおいて高校教育改革を進めるのであれば、全ての学科を設置すべき。
- 普通科の魅力化・特色化を推進するため、新しい普通科を設置すべき。
- 新しい普通科の学びについては、総合学科でも既に実現できている学びである。
- 新しい普通科を設置する場合には、徐々に全県に広めていく方が学科の魅力を発信しやすい。
- 鰯ヶ沢高校に未来デザイン科を設置し、地域の教育資源を活用しながら、探究活動に取り組むことで、同校が更に魅力ある高校となる。

4 定時制課程及び通信制課程に関する意見

- 多様な生徒に対応するため、定時制課程及び通信制課程は現状の配置を維持すべき。
- 定時制課程の高校は、日本語教育を必要とする生徒にとっても必要な高校となる。
- 通信制課程の高校に通学している生徒に対する通学の負担軽減に向けた取組が必要である。

5 その他

- 中学校卒業予定者数が減少する中であっても、教育の質を維持できるような取組を行う必要がある。
- 特色ある教育活動を維持するため、学校規模が縮小した場合であっても教員数を確保する必要がある。
- 中学生が入学したくなるような高校とするためには、各校の特色を明確化する必要がある。
- 公立・国立の大学を設置し、高校生が県外に進学しなくても、この地域で高等教育を受けられるとよい。
- 海外留学と同じ高等教育環境を整備することで、県内のみならず県外からの入学者を確保することができると考える。
- 高校教育改革の推進に当たっては、段階的な目標設定をした上で、PDCAサイクルを構築しながら取組を進めていく必要がある。
- 未就学児の保護者等にも意見を聞く必要がある。

【参考１】委員名簿（西北地区）

区 分	職 名 等	氏 名	備 考
市町村長	五所川原市長	佐々木 孝 昌	
	つがる市長	倉 光 弘 昭	
	鯉ヶ沢町長	平 田 衛	
	深浦町長	平 沢 一 臣	
	板柳町長	葛 西 健 人	
	鶴田町長	相 川 正 光	
	中泊町長	濱 舘 豊 光	
学校教育	五所川原市教育委員会 教育長	原 真 紀	
	つがる市教育委員会 教育長	山 谷 光 寛	
	鯉ヶ沢町教育委員会 教育長	阿 彦 正 弘	
	深浦町教育委員会 教育長	草 創 文 人	R7. 11. 14～R8. 5. 13
	深浦町教育委員会 教育長	佐 藤 紘 昭	R8. 5. 20～
	板柳町教育委員会 教育長	高 橋 幸 治	
	鶴田町教育委員会 教育長	山 本 真規子	R7. 11. 14～R8. 3. 31
	鶴田町教育委員会 教育長	竹 浪 誠 也	R8. 4. 30～
	中泊町教育委員会 教育長	鈴 木 信 也	
	つがる市立木造中学校 校長	中島谷 正 史	
	元県立五所川原高等学校 校長	大 瀬 幸 治	進行役
	元五所川原農林高等学校 校長	山 口 章	
P T A	五所川原市立第一中学校 P T A 副会長	和 田 祐 治	R7. 11. 14～R8. 3. 31
	板柳町立小阿弥小学校 P T A 会長	成 田 卓 也	R8. 4. 30～
	つがる市立木造中学校 P T A 会長	白 戸 和 也	R7. 11. 14～R8. 5. 9
	つがる市立車力中学校 P T A 会長	宮 崎 慎 士	R8. 5. 20～
	深浦町立深浦中学校	児 玉 恵 昭	
産 業 界	五所川原商工会議所青年部 出向理事	佐々木 邦 和	
	つがる市商工会青年部 監査委員	川 嶋 直 樹	

【参考２】オブザーバー名簿（西北地区）

■ 令和７年度

職 名	氏 名	備 考
県立五所川原高等学校 校長	三 和 聖 徳	
県立木造高等学校 校長	三 上 保	
県立鰯ヶ沢高等学校 校長	藤 田 明 彦	
県立五所川原農林高等学校 校長	玉 井 勝 弘	
県立五所川原工科高等学校 校長	山 口 正 実	

■ 令和８年度

職 名	氏 名	備 考
県立五所川原高等学校 校長	杉 森 晋	
県立木造高等学校 校長	三 上 保	
県立鰯ヶ沢高等学校 校長	田 村 博 文	
県立五所川原農林高等学校 校長	藤 田 明 彦	
県立五所川原工科高等学校 校長	秋 庭 淳	

【参考３】学校の在り方地区検討委員会の開催状況（西北地区）

	年 月 日	内 容
1	令和7年11月17日	○ 学校の在り方について ○ 学校配置について
2	令和8年 1月28日	○ 学校配置について
3	令和8年 4月30日	○ 学校配置について
4	令和8年 5月20日	○ 検討結果報告書（案）について

【参考 4】地区懇談会（令和 7 年 1 0 月実施）等の主な意見

＜学校の在り方＞

- 大学等への進学を目指す高校が必要である。
- 普通科は進路の選択肢が多様であり生徒のニーズが高い。
- 普通科でもデジタル分野を学べるようにしてほしい。
- 第 1 次産業の人財育成を担う農業科については、定員割れとなっても維持すべき。
- 工業は第 1 次産業ではなく、また、高卒採用より大卒採用の待遇がよいことを考えると、必ずしも高校段階で学ぶ必要はないのではないかな。
- 地域の建設業界の現状を踏まえ、土木工学を学べる学科を設置してほしい。
- 総合学科については、学びの内容を生徒がイメージしづらい。
- 生徒数の減少により、部活動の維持が難しくなることが予想されるが、そのような状況であっても文武両道を目指すことができる学校を配置してほしい。
- 進学については五所川原高校、就職は木造高校といった役割分担が考えられる。
- 北斗高校や尾上総合高校との連携による通信制課程の在り方を検討してほしい。
- 鰯ヶ沢高校の普通科を、データサイエンス科、未来デザイン科、探究科のいずれかに改編してほしい。
- 木造高校及び五所川原農林高校の配置を維持してほしい。
- 五所川原工科高校の普通科をデータサイエンス科に改編してほしい。

＜学校配置＞

- 所在市町村の生徒数の減少に合わせて学級減を行うのではなく、地区全体の状況を踏まえた学校配置を考える必要がある。
- 地区の学級数を考えるときには、その地区の私立高校の学科も考慮し、普通科ばかりが多いといったことにならないように配慮してほしい。
- 進学校については入試段階である程度の競争があることが望ましいため、五所川原工科高校の普通科を削減し、普通科を五所川原高校に一本化することも考えられる。
- 五所川原工科高校の工業科については、定員割れの状況が続いているため、学級減を行ってもよいのではないかな。
- 普通科のニーズが高いことを踏まえると、木造高校の総合学科を普通科に改編することも考えられる。
- 鰯ヶ沢高校については、地理的な要因や大規模校になじめない生徒の居場所になっていることを考えると、存続させるべきである。
- 五所川原農林高校と五所川原工科高校を統合すれば魅力ある高校になるのではないかな。生徒数が多いうちに統合することで学校の活性化につながるため、可能であれば前期実施計画のうちに統合すればよい。
- 中学校卒業予定者数が大幅に減少する中で学校数を維持していくと、小規模化が進み、それに伴い教員数も減少することから、これまでの学校の枠組みにとらわれることなく、新たな学校の形を模索していく必要がある。例えば、校舎制を導入し、農業系は五所川原農林高校、工業系は五所川原工科高校、商業系は木造高校の校舎に分かれるなどの対応も考えられる。

- こどもが減っているため統廃合は仕方ないが、一極集中しすぎている。せめて小規模の進学校を県内に満遍なく設置することはできないか。

＜その他＞

- 五所川原高校については、4学級規模になったとしても必要な科目を開設することができる教員数を確保してほしい。
- 五所川原工科高校の工業科については、県内企業に就職する生徒を多数輩出しており、地元の産業界からのニーズが高い。
- 知事部局と連携しながら、生徒の地元定着に向けた取組を進めてほしい。